

# 丸亀市立城坤幼稚園「Gathering～みんなで集おう～」開催レポート

2023年7月15日（土）「ソニー幼児教育支援プログラム」優秀園の丸亀市立城坤幼稚園・公益財団法人ソニー教育財団主催による「Gathering～みんなで集おう～」を丸亀市立城坤幼稚園を会場に開催しました。公立や私立の幼稚園・保育所（園）・認定こども園など、保育や教育関係者約80名の参加がありました。

以下に丸亀市立城坤幼稚園による開催レポートを掲載します。

## 【研究会概要】

1. 日時：2023年7月15日（土） 9：30～16：00
2. 会場：丸亀市立城坤幼稚園
3. 主題：「つながる・めぐる・深まる」～園庭も生きている～
4. プログラム
  - 1) 公開保育 9：30～10：50
  - 2) 開会式・研究発表 11：10～11：50
  - 3) ガイダンス・グループ討議（Enjoy! Gathering） 12：40～14：20
  - 4) 記念講演・仙田先生とディスカッション 14：30～15：50
  - 5) 閉会式 15：50～16：00

## 【公開保育】

今日の保育のテーマは『ほっと（安心）もっと（意欲）やった！（自信・自己肯定感）～自分の思いを出しながら～』とし、子どもの安心感を基盤に伸び伸びとありのままの自分を表出し、遊びこむ姿を参観していただいた。

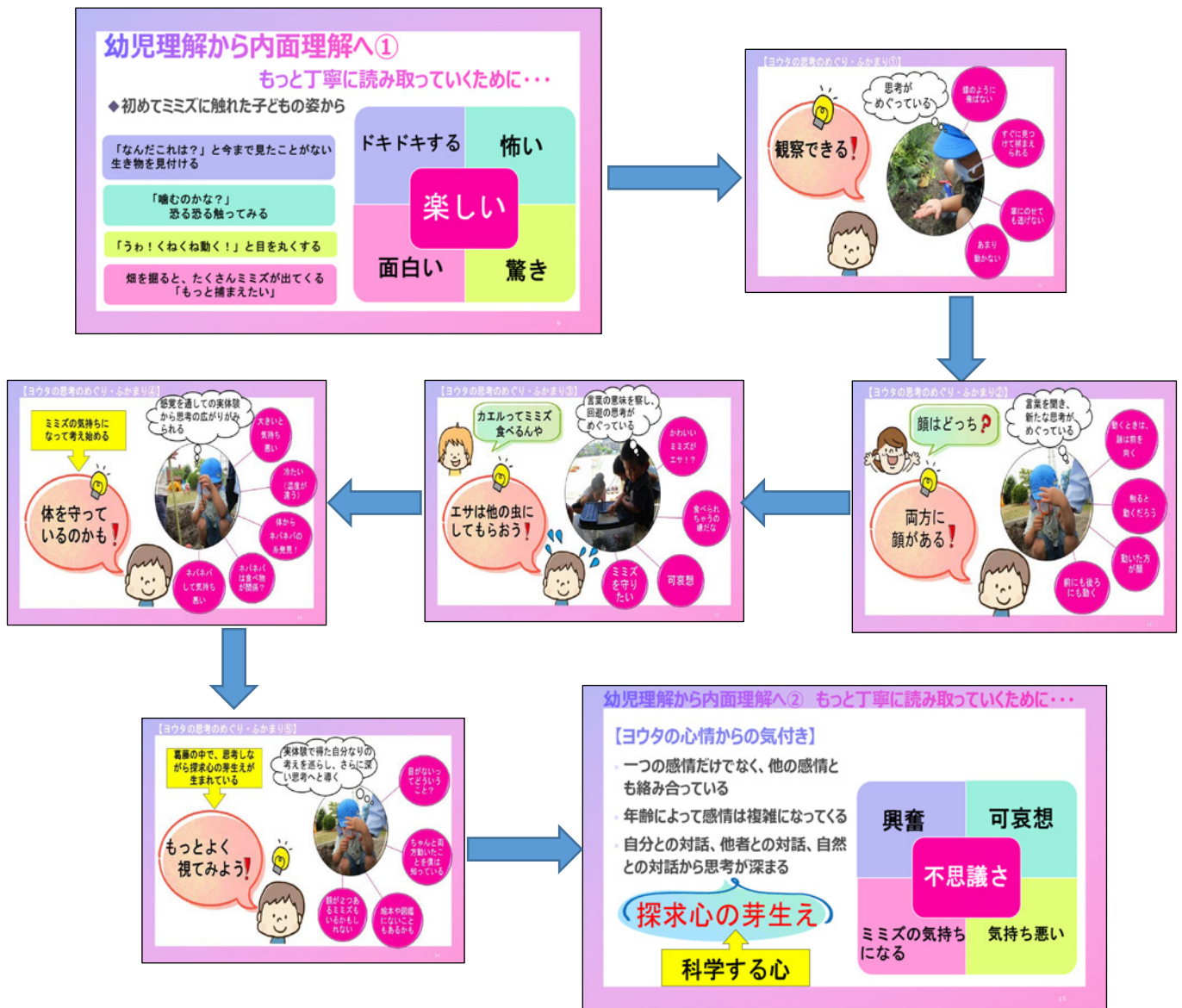
今年度は、子どもの心の動きから一人一人の好奇心や興味を探り、個々の思いや考えを肯定的に受け止め、意欲が高められるような遊びが創造できる環境を子どもと共につくっていくように心掛けている。日々、子どもたちが環境と関わる中で、自分の思いや考えを軸に取捨選択したり、これまでの経験と新たな実体験を積み重ねたり絡み合わせたりしながら、好奇心、興味、意欲をもって学びを深めている。その過程を丁寧に読み取り、その中で、子ども一人一人の思いや考えに温かく寄り添い、人・もの・ことに意欲的に関わることのできる環境や遊びを子どもと共に創造していけるよう、一人一人を多面的に捉え、幼児理解に努めながら保育に取り組んできた。また、3・4・5歳児の遊びの姿から子どもの育ちを支えていけるよう、保育後にはその日の遊びの様子や子どもの姿等を話し合い、幼児理解を深めながら、タイミングを逃さないように環境を構成したりさらに遊びを広げ深めていくために再構成したり、アイテムや仕掛けを考えるなど教材研究をしたりすることで、子どもの好奇心、興味、意欲を高められるように心掛けてきた。

当日は、保育室前の砂場に作った手作り池や傘を使っての水遊び、削った石鹸での泡クリームづくりやケーキのデコレーション、泥や土を使ってのパンづくり、築山の上からといをつないで、水が流れる速さやコース、流すものを試行錯誤している姿があり、子どもたちが感じている面白さ、不思議さ、新たな発見を保育者も共有しながら思う存分遊び姿が見られた。

【研究発表】

本園の教育目標は「元気いっぱい 笑顔いっぱい やさしさいっぱい」、目指す子ども像を「元気いっぱい 遊びこむ子ども 感性豊かな子ども 思いやりのもてる子ども よく考える子ども」として日々の保育に取り組んでいる。これまでの子どもの主体性を育む環境や保育者の関わり方について見つめ直してきた中で、子どもたちは安心感が基盤となり、いろいろなことに興味・関心をもち『ほっと（安心感）もっと（意欲）やった（自信・自己肯定感）』を繰り返しながら、主体的に取り組もうとする姿があった。この『ほっと もっと やった』を繰り返し積み重ねていく中で、豊かな感性や創造性を育む大きな原動力となっているのが『好奇心・探求心』でないかと考えている。子どもたちは、身近な環境との出会いの中で、見て、触れて、感じて、気付いて、試行錯誤して、挑戦して、また発見する面白さを感じる。この姿こそが好奇心の芽生えを探究していく姿だと捉え、自己、人との関わり、自然、と様々なつながり、めぐり、深まりの中で、育まれているのではないかと考え、研究に取り組んでいる。

=昨年度の事例より=『ミミズとの出会いから 自然界のめぐりを感じて(R4年5月~7月 5歳児の事例)』



私たちが子どもと環境を作るうえで大切にしていることは、今までの形式にとらわれないこと、例えば畑で子どもと一緒にミミズに触れる時間や空間を確保し野菜を植える日を遅らせたり、子どもがいつでも植えられるスペースを確保したりしている。また、保育記録を書くときには、子どもの表情や身振り、手振り、つぶやきを具体的に書くことで子どもの心の動きが見えやすくなってきた。さらには保育者自身の感情も素

直に書き記している。子どもを見取るだけでなく、自分自身が子どもの姿をどう捉えたか、またどのようにそれが変化していったかが見えてくるようになってきた。また、職員間で語り合うことで、様々な考えに触れ、子どもの自由な発想を受け止めることができ視野が広がってきた。また、保育者自身が好奇心や探求心をもつことも大切で、子どもと一緒に不思議さを感じたり、喜んだり、悩んだりと同じ気持ちを共有することが、子どもの内面理解につながっていくように思う。

現在、本園では、園庭環境に視点をあてた取り組みを行っていて、生き物がやってくる園庭環境、植物の栽培などに取り組んでいる。子どもと一緒に環境を作っていくうえで、大事にしていることは、日々、子どもが環境に関わることによって“子どもも環境も小さな変化をしている”ということを見逃さないようにすることであると思っている。小さな変化に気付ける感性豊かな保育者でありたい。

### 【グループ討議 (Enjoy! Gathering)】

#### ○自己紹介

6人ずつの10グループに分かれ、持参してきた園庭マップや写真などを見せ合い、自園所のプチ自慢をしながら自己紹介を行う。

#### ○自園・所で行っている小さな工夫

自分の施設で行っている小さな工夫を伝え合い、A4の紙にまとめて発表する。

#### ○夢の園庭プランを作ろう

グループごとに現実(場所・空間・広さ・時間・金銭面など)をすべて取り払って自分が思い描く園庭での子どもたちの関わりを想像しながら理想とする園庭をポストイットに記入し、同じような内容のものに分けて模造紙に貼る。グループごとに園庭のテーマとポイントを発表する。

#### = 夢の園庭(抜粋) =

##### 《門をくぐれば夢の国》



##### 《子どもとつくるどきどきわくわく》



##### 《自然いっぱいあそびのびと》



#### ～グループ討議を通しての学び～

- 各園で行っている様々な小さな工夫を聞いたことで、自園でももっと工夫できるところがあるのではないかと感じると同時に、身近なあたり前にある環境でも子どもの興味やつぶやきに耳を傾けることが大切であることに改めて気付くことができた。また、話し合いをする中で、自分の園のいいところも再認識することができた。
- 理想の園庭環境をグループみんなで考えていった後、今できることは何か、できないではなくできることを考えていくこと、自分の想像を超える環境、そこに込める思いや子どもたちの様子、また園庭の中にも

“くつろげる”“眺める”“ボーッとできる”などの場所の必要性など、全国の様々な立場の先生方と話し合う中で、自分とは違う視点について、知ったり気付いたり、考えたりすることができた。また普通の何気ない姿も「科学する心」であり、子どもの目線で見えていくことが大切であると思った。子どもにとって自然と触れ合える環境や戸外で遊ぶ面白さを感じることを大切さを共有しながら、語り合い、夢の園庭プランづくりができた。どんな環境も子どもの目線で、子どものために意図をもって作ることを大切さを学んだ。

★全国から集った先生方とのグループ討議だったが、皆さんすぐに打ち解け、和気あいあいと積極的に話し合う姿に、子どもたちのために！と思う気持ちは同じなんだと改めて感じるとともに集った先生方の前向きな姿勢に胸が熱くなった。

## 【記念講演】

演題 「科学する心を育む園庭の環境とは？」

～さまざまな自然との出会いとセンス・オブ・ワンダーな心もちをきっかけに～

講師 仙田 考 氏

田園調布学園大学大学院准教授

国際校庭園庭連合日本支部代表

子どもたちは、いかに本物の環境に触れられるか、直接的な体験の機会を得られるかということであり、様々な環境や直接的な環境との出会いを通じた驚きの環境、ワクワク感が乳幼児期は大切である。今、目の前にいる子どもたちにそのような環境に触れられるような場があるかどうかということを改めて考え直す機会となった。そして、この感覚こそが『センス・オブ・ワンダー』な考え方であり、五感すべてを使って感じることの喜びや、自然の中で情緒や豊かな感性を育む機会を多くもつことで、子どもたちの感受性や五感を育てていくことができ、興味・関心がさらなる好奇心・探求心へとつながっていく。だからこそ乳幼児期からの環境体験が不可欠であるということだった。

『センス・オブ・ワンダー』（不思議さに目を見張る心）をいつも新鮮に保ち続けるためには、子どもと一緒に再発見し、レイチェル・カーソンの言葉でもある『感動を分かち合ってくれる大人が少なくとも一人そばにいる必要がある』ので、保育者自身が子どもとともに自然に関わり楽しさ、不思議さ、面白さを共有していくように心掛けていきたい。

また、乳幼児期は、環境を通して行うことを基本としていて、その中で、様々な、多様な環境に好奇心・探求心をもって関わることを大切さ、また、子ども自ら関わりたいという気持ちを支え保育者自身も関わっていくことの必要性を再認識した。今後も保育者自身が不思議さに目を見張る心『センス・オブ・ワンダー』な心もちで、自然に関わるドキドキ・ワクワク感、面白がる気持ち、不思議がる気持ちをもって子どもたちに関わっていきたくて心を新たにしたい。そして、子どもの声をよく聞き、何が必要か小さな工夫をみんなまで考え話し合いながら、子どもと一緒に小さな発見や気づきを感じる“科学する心”をもち続けていきたいと思う。

## 【仙田先生とディスカッション】

担任の悩みを仙田先生とディスカッションすることで、会場の皆様とも共有することができ、短い時間ではあったが、有意義な時間となった。

【研修会後の感想について】～抜粋～

- 雑草が宝物に変身していた。園庭の環境にわくわくした。門をくぐれば夢の国だった。
- 夢の園庭環境を考え、話し合う中で、みんなで話し合う楽しさを改めて感じた。東京や徳島から来られていた方とも話せて大変刺激になった。
- 『感動を分かち合ってくれる大人が少なくとも一人そばにいる必要がある』レイチェル・カーソンの言葉は驚いた。いろいろなヒントを与えてくださったので、調べてみよう、考えてみよう、そんな気持ちになれる講演だった。
- 研究発表では、子どもの興味をつなげて深めていこうという先生の思いが子どもの育ちにつながっていることが分かった。派手な物があるわけではなく、身近な牛乳パックやストロー、傘などを使って子どもの興味関心に沿って環境がつくられていると感じた。プランターの置き方や支柱の差し方一つでも工夫したら見た目もすてきで、子どもも花を取りやすいなと感じた。とにかくやってみる！そして、その後の子どもの様子を見てどうしていくのか考えていきたい。

ご参加いただいた皆様、開催に至るまでにアイデアやご指導をいただきながらともに進めていただいた皆様に心より感謝いたします。